

2015年度名古屋芸術大学アート&デザインセンター企画展
「佐喜眞美術館のスタンス ～丸木位里・俊、ケーテ・コルヴィッツを中心に」展

2015年10月16日[金]ー28日[水]
開館時間12:15ー18:00
観覧無料、会期中無休

戦後70年、戦争の悲惨さと平和の尊さを次の世代に伝えていくために、芸術はいかなる役割を担うことができるのでしょうか。本学では今年度の美術学部特別客員教授に佐喜眞美術館館長の佐喜眞道夫さんを招聘し、展覧会と共に講演会やワークショップなどを開催します。沖縄の普天間基地をまるで“押し返す”かのような立地に建設された佐喜眞美術館。展覧会では所蔵作品から「原爆の図」で世界的に知られる丸木位里・俊夫妻が沖縄戦を題材に共同制作した連作や、20世紀前半のドイツを代表する女流作家ケーテ・コルヴィッツによる版画作品を紹介します。

主催 | 名古屋芸術大学アート&デザインセンター
企画 | 名古屋芸術大学美術学部アートクリエイターコース
協力 | 佐喜眞美術館



ケーテ・コルヴィッツ「母たち」戦争」第6葉>1922-23年



丸木位里・俊<チビチリガマ>(沖縄戦「談話三部作」より)1987年

関連イベント

特別講演会 1

「劫火」から「沖縄 うりずんの雨」までを語る
日時: 2015年9月24日[木] 18:30-20:00
場所: 西キャンパス B棟大講義室
講師: ジャン・ユンカーマン (ドキュメンタリー映画監督)
進行: 高橋綾子 (美術学部教授)

特別講演会 2

原爆から沖縄戦へー丸木位里・俊の絵画表現と戦争認識の変容
日時: 2015年10月17日[土] 14:00-16:00
場所: 西キャンパス B棟大講義室
講師: 小沢節子 (近現代史研究者)

公開ゼミ 1

『平和』の絵画を巡って～佐喜眞道夫と高・大生との対話～
日時: 2015年10月18日[日] 10:30-12:00
場所: 名古屋芸術大学アート&デザインセンター

特別講演会 3

沖縄に、戦後は訪れたのか～佐喜眞美術館のスタンス～
日時: 2015年10月18日[日] 14:00-15:30
場所: 西キャンパス B棟大講義室
講師: 佐喜眞道夫

公開ゼミ 2

版画に刻まれた祈り: ケーテ・コルヴィッツを語ろう
日時: 2015年10月27日[火] 16:30-18:00
場所: 西キャンパス B棟視聴覚室
講師: 長田謙一 (美術学部教授)、西村正幸 (美術学部教授)
進行: 美術学部美術文化コース学生

※講演会とゼミはすべて入場無料、予約不要です。
どなたでもご参加頂けます。

入場無料 どなたでもご覧いただけます。

Open 12:15ー18:00(最終日は17:00まで)日曜・祝日休館
スケジュールは変更になる場合がありますので、ご確認ください。

- 7/ 3 金 → 7/ 8 木 プレソツテン
- 7/10 金 → 7/15 木 2015年度前期留学生作品展
- 7/17 金 → 7/22 木 くうねるところにすむところ展
- 7/17 金 → 7/22 木 とりのひと
- 7/17 金 → 7/22 木 家族について
- 7/24 金 → 8/ 5 木 素材展
- 9/18 金 → 9/30 木 2015年度 企画展
これまでの客員教授から見えてくる「名芸のデザイン」
- 10/ 2 金 → 10/ 7 木 彫刻コース展
- 10/ 9 金 → 10/14 木 洋画1コース3・4年生展
- 10/16 金 → 10/28 木 2015年度 企画展
「佐喜眞美術館のスタンス～丸木位里・俊、ケーテ・コルヴィッツを中心に」展
- 10/30 金 → 11/ 4 木 アーソラジオ&大学院同時代表現研究企画展
- 11/ 6 金 → 11/11 木 遭遇するドローイング:ハノーファー&名古屋2015
- 11/13 金 → 11/18 木 MCDデパートメント
- 11/20 金 → 11/25 木 「幼稚園児たちのゲイジツ2015」展
- 11/20 金 → 11/25 木 「Hand hospice:医療と美術」展
- 11/27 金 → 12/ 2 木 洋画2コース2年生選抜展(仮称)
- 12/ 4 金 → 12/ 9 木 メディアデザインコース展
- 12/11 金 → 12/16 木 こどもの空間 絵本と椅子
- 12/11 金 → 12/16 木 2015年度 後期留学生作品展
- 12/18 金 → 12/23 木 日本画3年作品展
- 12/18 金 → 12/23 木 洋画2コース二人展(仮称)
- 12/18 金 → 12/23 木 「博物館とアートの出会い」(仮称)
- 1/ 8 金 → 1/13 木 ガラス・陶芸コース2・3年生合同展覧会(仮)
- 1/15 金 → 1/20 木 美術学部コース展

編集後記

戦後70年戦争をしていない日本は、だけと先進国の中で最も自殺者の多い国の一つでもあり、昔、何かしらと戦っているように感じます。平和の定義は一つではないし、「表現」が世界を平和に持って来ないかもしれない。でも言葉で表しきれない「何か」が人の心に触れることが、平和に繋がることはあるにちがいない。と美術に恋する身としてはやっぱり考えてしまいます。

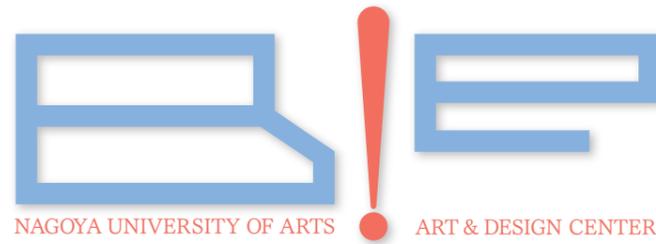
惣城友美(アート&デザインセンター)



最寄りの交通機関をご利用の場合
名鉄大山線(地下鉄舞臺線乗り入れ)徳重-名古屋芸術大学下車西へ約1,000m徒歩15分
※急行一乗電車の場合は西春駅で普通電車に乗り換え下車してください
中部国際空港からも名鉄大山線をご利用ください
西春駅から北西約2,200m徒歩25分、西春駅からはタクシーの便もあります
自動車をご利用の場合
名神一宮インターから10分、名神小牧インターから15分



大学基準協会認定マーク
本学は2011年4月に、大学基準協会の大学基準に適合と認定され、認定評価を再取得しました。
認定期間は、2011年4月から2018年3月までです。
これにより、法令化されている「第三者による認定評価」にも合格したことになります。



NAGOYA UNIVERSITY OF ARTS ART & DESIGN CENTER NEWS

2015. Vol. 43

平和へのスタンス

It's my stance for world peace

ジャン・ユンカーマン監督が語る丸木夫妻ー沖縄、そして佐喜眞美術館のスタンス

映画「沖縄 うりずんの雨」は、戦後70年を経た現在も平和を求めて不屈の戦いを続ける沖縄をテーマにその差別と抑圧の歴史をたどりながら、人々の怒りと失望の根源を探っていくドキュメンタリーである。ジャン・ユンカーマンさんは、はじめて監督した「HELLFIRE: 劫火ーヒロシマからの旅ー」(1986年)で「原爆の図」を描く丸木位里・俊夫妻を追って以来、一貫して社会的・歴史的な題材を、アメリカ人としての立場に真摯に向き合いながら問いかけている。名古屋芸術大学アート&デザインセンターで10月に開催される「佐喜眞美術館のスタンスー丸木位里・俊、ケーテ・コルヴィッツを中心に」展のプレ講座に先立って、ユンカーマン監督にお話を伺った。

聞き手・まとめ 高橋綾子 美術学部教授



「原爆」を伝えること

丸木先生たちとの出会いは1975年です。もともと僕は、ヒロシマとナガサキ、つまり原爆のことに関心をもって、1969年に日本の高校に留学し、アメリカの大学を修了してからまた来日しました。当時は英会話を教えながら、社会的な問題取材し記事を書いており、出版関係の知人が三里塚闘争の活動家などを紹介してくれ、その流れの中で丸木夫妻にも会わせてくれたのです。

キノコ雲のイメージだけで被爆者の姿を知らなかった僕には、「原爆の図」は本当に衝撃的で、埼玉県東松山の丸木美術館を何回も訪ね、尊敬する先生たちと親しくなってきました。やがて「原爆の図」をアメリカで紹介したいと考えようになったのですが、雑誌の小さな図版ではあの迫力は伝わらないと悩み、歴史家のジョン・ダワー先生の助力もあって、ウィスコンシン州の助成を得て制作したのが映画「劫火」です。当時の僕はフリーライターだったので、とても孤独でした。しかしドキュメンタリー映画は共同制作ですから、本当に有意義な経験でした。

沖縄を知ること

75年当時、アジア太平洋資料センター(PARC)で英文通信に関わっていた僕は、米軍基地の反対運動に出会います。その年の暮れから6ヶ月沖縄に滞在していたのですが、その文化や自然の奥深さに惹かれると同時に、<アメリカ人としての責任>を問うということが自分のテーマになっていきました。丸木先生たちとの出会いの時期も重なって、<沖縄と原爆>は40年間持ち続けている僕の思い入れのあるテーマ。つまり、アメリカ人としての僕が、アメリカの人たちに伝えてほしいことです。

『沖縄 うりずんの雨』は、制作に3年半かかってしまいましたが、戦後70年の今年に公開することになって、とてもメディアの反応がいい。それだけ今おこっていることへの危機感や、沖縄をもっと知りたいという人たちが多くいるということです。



ジャン・ユンカーマン監督



写真上/沖縄戦当時、富盛の石形大獅子(沖縄県指定有形民族文化財)を弾避けに日本軍の様子を窺うアメリカ軍。写真下/周囲の風景は変わったが、今も無数の弾痕を残したまま、同じ場所に行んでいる。

名古屋芸術大学 Art & Design Center
〒481-8535 愛知県北名古屋市徳重西沼65番地 TEL [0568] 24-0325 FAX [0568] 24-2897

Ble Vol.43
発行日 2015年9月15日
編集 高橋綾子(美術学部美術文化コース)/惣城友美(アート&デザインセンター)
発行 名古屋芸術大学アート&デザインセンター
〒481-8535 愛知県北名古屋市徳重西沼65番地 E-mail adc@nuu.ac.jp URL http://www.nuu.ac.jp
2015 Printed in Japan © Art & Design Center, Nagoya University of Arts デザイン/印刷 サンメッセ株式会社



平和へのスタンス

It's my stance for world peace

ドキュメンタリーという手法

今回の作品では、僕がナレーションをしています。沖縄に関して、皆とても辛い話をしてくれました。象徴的なエピソードを、実際に経験している人たちの言葉でつなぎました。だからその人たちの言葉をただじっと聞いているだけはいられない、僕は彼らと対面し対話する存在でもありました。

95年に起きた少女暴行事件など衝撃的なインタビューもありますが、それらの背景を丁寧に見せないで、ちゃんと伝わらないと強く思って編集しました。僕のルーツはジャーナリストなので、歴史的・政治的な事実を中心に扱うことが大事で、映像の構造や美しさにはこだわらないですね。こだわりは編集のリズムなのです。

4章からなる長編ドキュメンタリーは時間軸を追うのではなく、ひとつひとつのエピソードを重ねることで成立させました。観客に考えさせる内容になっているので、メッセージはあるけれど、しかしメッセージ性が強い映画ではないのです。

真正面に向き合うこと ～佐喜眞美術館のスタンス

佐喜眞道夫さんとは、たぶん鍼灸医として丸木先生たちと接しておられる時に、東松山で出会ってはいけません。「映画 日本国憲法」の時には丸木先生たちの大作「沖縄戦の図」の前で、撮影もしました。僕は佐喜眞さんと、そして美術館の存在自体をとても素晴らしいと尊敬しています。美術作品と美術館とその場所、つまり基地の中に美術館があるということ、すべてに統一性がありますよね。

丸木先生たちもケーテ・コルビッツの作品も、静かな抵抗の印がありますが、もうひとつの働きがあるのではないのでしょうか。描かれた事実は、とても悲しく複雑な思いをさせるような内容ですが、その画面を見ている時に、嫌な気持ちにはならない。「原爆の図」もそうですが、美術の力をおとしているからなのでしょう。「死んでも美しく描く」と、俊先生はよく言っておられた。死んだ人たちに再び、描くことで命を与えている。そうすることが人に絶望ではなく、希望を与えてくれるのでしょうか。

事実は真正面から向き合うことで、人は力をもらえるのではないのでしょうか。歪んだ見せ方をすると、人は気持ちを整理できなくなる。

『沖縄 うりずんの雨』でも、悲しい話や辛い話、これもあれもと重ねていて、本当に人に見せられる作品ができるだろうかと思ったこともありました。しかし見終わった人たちの多くが、決して悲観せずに希望を感じる。客観的で信頼できる視点だと評してくれています。

真正面に向き合うこと。国内の上映活動でしばらくは奔走しますが、やはり、この作品をアメリカで公開しなければ…と、もちろん考えています。

(2015年8月6日 シグロにて)



「沖縄 うりずんの雨」より 大田昌秀 (元鉄血勲皇隊/沖縄戦当時18歳/元沖縄県知事)



「HELLFIRE: 劫火」DVD 発売中 ※「ひろしまのヒカ」(監督:土本典昭) 同時収録 発売・販売:株式会社シグロ



名演小劇場での舞台挨拶



場面写真提供:株式会社シグロ

「名古屋電腦博覧会2015」

2015年7月1日[水] - 5日[日]
名古屋市民ギャラリー矢田
第1展示室～第7展示室

『名古屋電腦博覧会』は、愛知県内の芸術系五大学のメディアに関わる卒業生、学生によるメディアアート/メディアデザインに関する展覧会である。既にやや懐かしい響きさを感じる『電腦』という言葉にこめられたものは、コンピュータ、映像、音声、インタラクティブなど、ローテクからハイテクまで含めた多様なメディア表現を幅広く紹介しようという意図である。

吉田めぐみの『金魚の見た夢』は、会場の一角に水槽が置かれており、その奥の壁面には、水槽の内側(水中)から眺めている視点の映像が映し出されている。私たち観客は、その視線の持ち主(金魚?)を水槽の中に見つけ出そうとするが、実際には金魚は不在である。透明人間ならぬ透明金魚が水槽の中にいるのか? 吉田自身による解説によると、以前、水槽の中に実際に存在し泳ぎ回っていた金魚の、水中における軌道が3次元的なデータとして記録されており、その金魚の軌道を元に、リアルタイムに撮影されている水槽内からの映像を切り出して(あたかも当時の金魚が、今水槽内から外を見ているように)壁面に上映しているとのこと。私はこの作品を見て「複式夢幻能」(註1)の構造を思い浮かべた。この能楽は、シテと呼ばれる主人公とワキとよばれるもう一人のキャラクターの対話形式で物語が展開する。吉田の作品における金魚は、作品鑑賞時には不在なのでシテの立場に立つが、観客に受動的な視野を与えるという点ではワキの立場(註2)に立つ。しかしむしろこのような不在を媒介とした混乱こそが、体験を時空間にマッピングする手法として面白い効果を出している。

小島沙弥香の『こじまのはんこや』は、身近な友人やFacebookで知り合った人の似顔絵や氏名などを消しゴムに彫ってスタンプ化する一連のプロジェクトである。制作物自体は、非常にアナログなものであるが、消しゴムスタンプをオーダーした相手と話しあひながら、文字や図像を調整する作業の中でかたちづくられる個人人間関係が、やがて一種の信頼関係となり、地域のコミュニティなどへジワジワと広がっていく。また地域の子ども会などでおこなうスタンプ制作の出張ワークショップは、電子メディアの発達で薄れつつあるリアルな人間関係の再構築に役立っている。その際に媒介になるものが、氏名や似顔絵の彫られたスタンプであり、それはメールアドレスやURLとは異なり、物理的に個人々人をリプレゼンするものである。また同時に、押印によっていろいろな場所に文字や似顔絵が複製されるというメディア本来の機能もきちんと維持している。この展覧会は隔年開催で、今年が3回目となるが、近年はメディア技術の先進的な側面よりも、むしろ文化的な側面や、メッセージの多様性のほうに重心が移動してきたという印象を受ける。今後もメディアの技術的な枠組みにはあまり縛りを設けず、多種多様な文脈の中でメディアに関わる仕事を積極的に紹介していくことが望まれる。

津田佳紀 デザイン学部教授

(註1) 15世紀に世阿弥が完成させた能楽の形式のひとつ。そのスタイルは、「旅人であるワキが、里人(シテ)に当地の過去の出来事や、それに関わった人の消息について尋ねる。里人(シテ)は最初、普通に答えるが、突然、自分こそがその出来事の中心人物の亡霊であると言って消える。舞台の後半では、読経するワキの前に、再度亡霊(シテ)が現れ昔の記憶を語る」といったものである。

(註2) この場合のワキは、映画『ヘルリン・天使の詩』において、天使ダミエルの存在を感じ取ることでできるピーター・フォークのような立場に相当する。



吉田めぐみ『金魚の見た夢』(部分)



小島沙弥香『こじまのはんこや』



小島沙弥香『こじまのはんこや』



吉田めぐみ『金魚の見た夢』

ART WORDS FROM THE ART WORLD



美術批評家/沖縄県立芸術大学准教授
土屋 誠一
Seiichi TSUCHIYA

芸術一話 第19話 抵抗のための沖縄観光

沖縄に転居して7年目になる。2000年代には、「沖縄の美術」がクローズアップされた。では近年、「沖縄の美術」なるものが注目を浴びているかと言えば、そんなことはないだろう。転居当初は「あの沖縄へ!」と希望に溢れていたわけだが、目下の率直な感想としては、この7年間、沖縄における美術界はほぼ無風状態で、芸術大学の教員の端くれとして、なんとも無力だと感じる。

とはいえ、沖縄でなにも起こっていないかという、勿論そんなことはなく、今日まで続く安倍政権下における辺野古新基地建設の推進がある。2011年には東日本大震災があり、このあたりから日本は明らかに「おかしくなった」が、国政の暴走には、日米安保下における「基地の島」沖縄も、無関係ではいられない。

しかし、ここ最近ではオルタナティブ・スペースがいくつかでき、美術関係者も沖縄を度々訪れるようになってきている。それは、この「おかしくなった」国の状況に対する、ある種の抵抗の作法なのだと思う。2020年にオリンピックを控えた今、地方でのアートフェスの波は、必ず沖縄にも押し寄せてくるはずだ。国策として美術を使役するグローバリズムの波は、自生的な文化の運動を根絶やしにするだろう。そのような状況に抵抗するためには、知力と体力を鍛えておかねばならないが、そのためには移動し続けることが重要だ。ひとまず観光でもいいので、沖縄の現在の状況を目撃しておくことをお勧めしたい。